

令和5年度入学試験問題

学校教員養成課程共通（小論文）

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答はすべて別紙解答用紙に記入しなさい。
3. 解答用紙は1枚です。
4. 解答用紙には、受験番号を記入する欄が1箇所あります。
5. 解答はすべて横書きにしなさい。
6. 試験終了後、問題冊子及び草稿用紙は持ち帰りなさい。

次の文章は、日本の英文学者であり言語学者でもある外山滋比古の著書『思考の整理学』の中で、学校教育について述べられている部分を抜き出したものである。

あなたは、この文章を読んで、学校教育はどのようにあるべきと考えるか。また、それは、本学での学修やその後の社会生活にどのように生かすことができるかと考えるか。あなたの思いや考えの立場を明らかにして、今後の展望を含めて、600字以内で述べよ。

グライダーと飛行機は遠くからみると、似ている。空を飛ぶのも同じで、グライダーが音もなく優雅に滑空しているさまは、飛行機よりもむしろ美しいくらいだ。ただ、悲しいかな、自力で飛ぶことができない。

学校はグライダー人間の訓練所である。飛行機人間はつくらない。グライダーの練習に、エンジンのついた飛行機などがまじっては迷惑する。危険だ。学校では、ひっぱられるままに、どこへでもついて行く従順さが尊重される。勝手に飛び上がったたりするのは規律違反。たちまちチェックされる。やがてそれぞれにグライダーらしくなって卒業する。

優等生はグライダーとして優秀なのである。飛べそうではないか、ひとつ飛んでみる、などと言われても困る。指導するものがあつてのグライダーである。

グライダーとしては一流である学生が、卒業間際になって論文を書くことになる。これはこれまでの勉強といささか勝手が違う。何でも自由に自分の好きなことを書いてみよ、というのが論文である。グライダーは途方にくれる。突如としてこれまでとまるで違ったことを要求されても、できるわけがない。グライダーとして優秀な学生ほどあわてる。—(略)—

指導者がいて、目標がはっきりしているところではグライダー能力が高く評価されるけれども、新しい文化の創造には飛行機能力が不可欠である。それを学校教育はむしろ抑圧してきた。急にそれをのばそうとすれば、さまざまな困難がともなう。

他方、現代は情報の社会である。グライダー人間をすっかりやめてしまうわけにも行かない。それなら、グライダーにエンジンを搭載するにはどうしたらいいのか。学校も社会もそれを考える必要がある。—(略)—

グライダー専業では安心してられないのは、コンピューターという飛び抜けて優秀なグライダー能力のもち主があらわれたからである。自分で翔べない人間はコンピューターに仕事をうばわれる。

【引用文献】 外山滋比古『思考の整理学』(1986, 筑摩書房)